



『誇り』

愛知県立古知野高等学校

尊厳を守るケア。インフォームドコンセント。その人らしく生活できる支援。福祉科で学ぶ私達にとって当たり前のことであるこれらの内容は、現場でどのように実践しているのだろうか。介護実習は、学校で学んだことを活かし、多くの介助実践の機会が得られる大変有意義な場である。しかし、同時に介護現場が抱える問題点や、生と死に向き合う苦しみなど、リアルな世界を知る機会だとも感じている。

私は、夏と冬の計19日間、介護老人保健施設で実習を行った。そこで私が見たものは介護の光と影だ。終末期ケアを受けられているA様と出会ったのは実習初日のことである。その日は体調が良く、清拭を行うことができた。発話することが困難なA様に「さっぱりしましたね。」と職員の方が声をかけた。するとA様はゆっくりと頷いた。尊厳を守るために、最期の時までできる限りの支援を行うことの大切さを身をもって感じた瞬間だ。2日目、A様の居室からは苦しそうな喘鳴が聞こえた。職員の方は様子を見るために度々居室を訪れ、寄り添い、共感し、最期の時を共に過ごそうとしていた。そんな姿を見て、私に何ができるのだろうかと考えながら2日目の実習を終えた。3日目の朝、居室にA様の姿はなかった。ぽっかりと空いた居室には、A様のご家族と過ごしてきた日々や施設での暮らしが垣間見える写真が飾られていた。介護職員は家族に代わることはできない。しかし、利用者様を大切に思い、最期の時まで寄り添いながら、死と向き合うことが大切なのだと知った。

実習も後半に入ったある日の事だ。

認知症により、失認の症状が見られるB様が「助けて下さい。」と訴えていた。難聴もあるB様が不安であると思った私は、思わず手を伸ばした。側にいるだけでも安心して頂けると考えたからだ。手を握ると「ありがとうございます。」と強く握り返してくれた。B様の気持ちが理解できた気がして嬉しかった。しかし、職員の方は「いつものことだから。大変でしょ。放っておいていいよ。」と言った。しかし、私はなかなか手を離すことはできなかった。

これが「慣れ」というものなのだろうか。「いつものこと」として、利用者様の訴えを聞き逃すことはあってはならない。介護の喜びは、利用者様との関わりからしか生まれないと私は考えている。昨日まで出来なかったことが今日は出来たり、なかなか覚えて頂けなかった名前をふとした時に呼んで下さったりと、何気ない日常に介護の喜びが詰まっていると思う。「いつものこと」などは存在しないはずである。だからこそ、介護者である私達は、エンパワメントの視点を大切にして、利用者様のもつ潜在能力を引き出し、可能性を広げることが大切であると思う。これらを実践できるのは、一番近くで生活を支える私達であり、そのことに誇りを持つべきであると感じている。

私はこれまでの経験を通して、介護福祉士のあるべき姿について考えた。それは、喜びや悲しみなどを共に分かち合い、利用者様の最期の時まで幸せに暮らせるように支援していくことだ。時間が経ち、私も「いつものこと」に流される日が来るのかもしれない。そう考えると、少し怖いというのも正直な気持ちだ。だからこそ、利用者様のことを心から気に掛け、優しさや大切に思う気持ちで利用者様の生活を守りたいと思う。そして根拠に基づいた介護を実践し、利用者様の生活を支援していきたい。

尊厳を守るケア。インフォームドコンセント。その人らしく生活できる支援。それは、決して机上の空論ではない。さり気なく実践する者が、介護福祉士なのだ。私は、そのような介護のプロフェッショナルになりたい。